

「創造型劇場の芸術監督・プロデューサーのための基礎講座」

第5回 2010年6月15日

平田オリザ（こまばアゴラ劇場）：地域における劇場の役割

司会：野村政之（こまばアゴラ劇場）

野村：今日は平田オリザから「地域における劇場の役割」ということでお話しいただいた後、ここまでの講座のフォローもしたいと思います。

平田：今日のメニューは、前回の宮城さん、第2回目の高萩さんの話を聞いてほしい皆さんもイメージがつかめてきたと思いますが、芸術監督や劇場プロデューサーに1番要求されているのは、様々なステークホルダー、利害関係者をどのように説得していくかという能力です。もちろんそれ以前に芸術家としての能力もありますが、それは前提なので、それ以外に、第1段階は自分の作品の意味づけとか、そういったものをどのように他者に説明していくかから始まって、演劇全体の役割とか芸術全体の社会における役割などを、ある時は経済人に、ある時は地元の住民の方たちに、ある時は教育関係者に、ある時は政治家に、それぞれ別々に説明しなければいけません。これは演劇人や芸術家に限らず日本人が苦手としている分野だと思っています。今、大阪大学のコミュニケーションデザイン・センターにいますが、ここでも問題になっているのが、日本の学校では内容が良ければ大体通じるはずだ、という教育を皆さんは国語教育の中で受けてきて、相手によって説明を変えるのは日本の道徳からするとよくないこと、二枚舌のように思われがちだということです。そうではなく、相手によってきちんとボキャブラリーを変えて、相手の立場で説得していくことは、特に今私がやっている大学院、科学者達がどうやって一般市民や政府や事業仕分けの人に説明していくかという時に重要になりますが、そういう教育を私たちは受けてきていないので、プレゼンテーションには1つの正解があって、正しい説明をすれば誰でも説得できるみたいに習ってきてしまっています。そこに大きな問題があるのではないかと思っています。今日は例として地域に焦点を当てて、街づくりの視点から劇場がどういう役割を果たすかということと、こんな説明の仕方もあるという例として観光という視点からの話をして、後半は皆さんの質問や意見を聞いて、今まで出てきた話を整理していきたいと思っています。

では地域における劇場の役割ということで、特に街づくりの視点から劇場の役割を考えてみたいと思います。僕は1年の2/3ぐらいを東京以外で過ごしています。特に国内はこの15年ぐらいずっと回っていて、1番感じるのは日本の地方都市の風景が画一化してきたということです。今から話すこと、特に観光についてのことなどはメタレクチャーです。レクチャーの内容も聞いてもらいたいですが、こういう風に行政や経済の人を説得するという部分もあるので、その二重構造をよく理解して下さい。僕がものすごく観光のことが

やりたくてやっているというわけではありません。

地方都市がどう画一化してきたかという、旧国道があって、バイパスがあって、バイパス沿いに大きなショッピングセンターができて、旧市街地はどんどん寂れていきます。シャッター銀座という言葉があるように、アーケード街の半分ぐらいがシャッターが下りてしまっているのは県庁所在地レベルでも結構あります。例外的に免れているところもありますが、中心市街地の空洞化は、ほとんどの地方都市にとって最大の問題です。精神的にも寂れてきてしまいます。私たちの劇団はこの間ルーマニアに行っていましたが、シビウという有名な演劇祭がある町があって、人口 15 万人です。ルーマニアは人口 2000 万ぐらいだと思いますが、ブカレストが 200 万で、あとは全部 20 万とか 15 万の都市です。シビウは本当に小さい都市ですが、真ん中の商店街がすごく賑わっていて人にあふれています。演劇祭期間中だということもあると思いますが、カフェがずらっと並んでいて、みんなお茶を飲んで人生を楽しんでいます。学生の街だということもありますが活気があります。ルーマニアは国民所得が 1 万ドルを少し超えた程度で、やっと中進国の仲間入りをしたぐらいです。EU ですがまだユーロになれないぐらいに貧しい国です。大卒の初任給が 2 万円ぐらいだそうです。日本の 1/10 とか 1/7 ぐらいの経済規模です。それでも地方都市はすごく賑わっています。日本の地方都市はなぜこんなに寂れてしまったのでしょうか。僕は 1979 年に初めてアメリカに行きましたが、日本の地方都市は、70 年代末のアメリカの風景に非常によく似てきたと感じています。70 年代末のアメリカはベトナム戦争の影を引きずって、経済的にも精神的にもアメリカが最も落ち込んでいた時代でした。中心市街地はスラム化して入れませんでした。白人中産階級は車でショッピングセンターに行って帰ってくるだけというような状態になっていました。このときは自転車で行ったのですが、市街地に美術館などがあっても自転車で行くのは本当に危険で、白人たちに止められました。どうしても行きたい時はすごい緊張感がありました。あるいは周辺で自転車を止めてバスなどで行くというような状態でした。日本はまだこれほどひどくはなっていませんが、空き店舗がいわゆる不良少年たちのたまり場などになって犯罪の温床になっているという報告も出てきています。スラム化が徐々に始まっているということです。これは少なくとも戦後 60 年、日本が経験していない状態です。街の中に一定区域、一般市民が入れない地区があることは経験していません。大阪の西成が少しあるかなというぐらいです。しかし普通の県庁所在地レベルの都市でもそういう傾向が徐々に表れつつあります。こういう風景を皆さんは普通に見ていますが、これはたかだかこの 20 年ぐらいでできてきた風景です。バブルの前後から、消費社会が急速に全国に拡大したということです。地方出身の人はわかると思いますが、かつては地方都市には東京資本のデパートはありませんでした。ニコニコ堂とか天満屋とか地方資本のデパートしかありませんでした。都銀も都市部にしかありませんでした。東北地方だと東京三菱とか三井住友とか財閥系の都市銀行は仙台にしかありませんでした。今はどこにでもあります。ATM もどこにでもありますが、こういうものはこの 20 年で一気に広がりました。今は空気のように当たり前になっているのでみんな気づきま

せんが、消費社会と金融経済が急速に全国に拡大したということです。それは決して悪いことだけではありません。どんな地方に住んでいる人でもいい商品を安くいつでも手に入れることができるようになりました。しかしその利便性を追求するあまり、私たちが失ってきてしまったものが当然あるのではないのでしょうか。その失ってしまったものとは、経済原理だけで考えると一見無駄に見えるような時間や空間です。抽象的に言えば、となりのトトロに出てくるような鎮守の森、これは空間です。祭りとか伝統芸能の継承という時間、といったものも失ってきてしまいました。もっと具体的に言うと、商店街がつぶれると、1番最初になくなるのが銭湯と床屋さんだと言われています。床屋さんと銭湯は浮世床と浮世風呂という題名に象徴されるように、江戸時代以来のコミュニティースペースでした。そういうものがだんだん失われていってしまいます。僕は駒場商店街の中で生まれ育ちました。今あるこまばアゴラ劇場は昔の普通の木造の2階家で、うちの家族が住んでいました。2軒隣に今も床屋さんがあって、僕はそこでしか髪を切ったことがありません。海外にいる時など、他で切ったこともあります。2軒隣だと他で切るとばれてしまい、近所なので面倒くさいのです。面倒くさいですがそこに行くくと貴重な情報がいろいろ得られます。商店街で育った人や、ある一定の年齢以上の人はわかると思いますが、昔の床屋さんは髪を切っている人の横で子供がずっと漫画を読んでいて、その隣でいつ仕事をしているのかわからないおじさんたちが将棋を指したりしていました。将棋を指しているおじさんたちは経済活動からいうと明らかに無駄な存在です。でもこの人たちが子供たちに対する無意識のセーフティー・ネット、教育係であり監視係の役割を果たしていたのです。今よく住宅街などで犬の散歩の時間を子供の通学の時間帯に合わせてくださいと言っています。そうやって監視システムをもう1度作っていかうということです。でも商店街ならそんなことは必要ありませんでした。僕は商店街で育てられたので、他の家に預けられることもしょっちゅうありました。店が忙しかつたりすると、お互い預けあったりしていました。駄菓子屋さんに子供が買い物に行くと、1万円札を持っていたら駄菓子屋のおばさんはその子かお母さんに注意します。そういうのが無意識のセーフティー・ネットです。今はコンビニで子供が500円玉で買おうが1万円札で買おうがアルバイトの店員は黙ってレジを打ちます。マクドナルドも同様です。マニュアル化は効率化なので無駄が省かれます。しかしコミュニケーションは基本的に無駄な部分に存在するので、経済活動だけで考えると必要ありません。そういうものがどんどん削られていってしまうのが今の現状ではないのでしょうか。ここで大事なのは、消費社会、経済原理中心の社会は地方都市ほど荒々しく働きます。私たちの中には、田舎はいいとか、地方はのんびりしていて人情もあるという幻想があります。実際そういう面もありますが、いったん消費社会が入り込んでくるとそうもいかなくなってきます。青年団は95年に沖縄県の与那国島で1か月、アーティスト・イン・レジデンスで作品を作るという仕事をしました。与那国島は東京から2000キロ、台湾から120キロという日本で1番西の端の島です。ここには本屋さんがありません。雑貨屋さんに漫画は置いてありますが、ジャンプとかマガジンとか絶対売れる本しか置いてありません。

スピリッツとか週刊文春とかでさえ置いてありません。本を買おうとすると40分飛行機に乗って石垣島まで行かなければいけません。石垣島にも僕の本は当時は置いてありませんでした。僕の本を買おうとすると、さらに1時間飛行機に乗って那覇まで行かなければいけません。では、与那国の人は僕の本を読まなくてもいいのか、いいと言われればそれまでですが、そうじゃないから私たちは二千数百の公立図書館を全国に作ってきたのです。本を読むのは少なくとも憲法で保障されている健康で文化的な最低限度の生活の、文化的な生活の部分に該当するので、本を読む権利は地域間格差や経済格差に関係なく国民に保障しようという考え方です。経済原理だけに任せてしまうと、文化的なものは経済から見ると無駄なので、末端ほど文化的なものは切られていってしまいます。在庫や、流通のコストがかかるからです。では、そういう周辺に住む人たちは、そういう文化に触れないでいいのでしょうか。これは、皆さんも無意識のうちに経験しています。地方都市の人はわかると思いますが、大規模ショッピングセンターには必ず全国チェーンなどの本屋さんがあり、本の並び方は全国全部一緒です。最近では地元の本のコーナーなどを作っていますが、基本的にはレジに1番近いところに1番売れる本が置いてあります。これがPOSシステムでレジの売り上げと直結で連動していて、コンピューターで全国の情報が行きわたるので、全国で一律の本の並びになります。皆さんは市場原理によって無意識に思想統制されているということなのです。かつては県庁所在地レベルの都市なら1軒ぐらいいろんな本屋さんとか明らかに偏った古本屋さんとかあったものです。だいたい店主は全共闘だったとか天井敷に2年いたとか、そういう人がUターンして親の本屋さんを継いでマニアックな品ぞろえの本屋さんをやっていました。昔はそれでも成立しました。商店街は基本的にポテンシャルがあり、家賃を払わないでいいので、そこそこ売り上げがあれば身銭が入ればやっていけます。昔はそういう本屋さんは雑誌を売って商売が成り立っていました。今は雑誌はコンビニで買い、本はアマゾンでも買えるので、経済原理からすると無駄で成り立たないような本屋さんは東京や大阪でしか生き延びられなくなっています。地方都市には無駄を許容するだけの経済的な余力がなくなっているということです。だから経済原理は地方ほど荒々しく働くということです。では、地方都市にそういう本屋さんがいらないかというところはいきません。そういう本屋さんなどが地方の文学少年を育ててきたのです。立ち読みしていると、お前もそろそろ大人なんだからドストエフスキーを読んでみるとアドバイスしてくれたり話したりしてくれて文学に目覚めさせるような役割があります。青年団がずっと付き合いのある帯広の大通り茶館という喫茶店があります。マスターはずっと演劇をやっている人で、帯広劇研という劇団をやっていて、ずっとワークショップなどで付き合いがあって、そこの25周年に書き下ろしたのが「隣にいても一人」という作品です。その作品は青年団でもずっと再演をさせていただいています。ここは十勝管内の演劇人や文化人のたまり場に今でもなっています。とても小さな喫茶店で、今でいう漫画喫茶の奔りみたいなものです。なぜかテアトロとか演劇ぶつとか、昔の新劇とか全部バックナンバーがあります。そこで鐘下辰男さんは育ったのです。そういう土壌があると

ものすごい田舎でも才能が育ってくるし、そういう変な大人と触れる場所がないと地方では才能は出てこない。そういうことが大事なのではないのでしょうか。

例えば10年ほど前に、ある雑誌がなぜ地方都市に青少年の凶悪犯罪が増えているのかという特集を組みました。ちなみに青少年の凶悪犯罪自体は全国的には増えていません。問題は地方都市に拡散しているということです。いくつか理由が挙げられていますが、1つは若者の居場所が限られて閉塞化していることです。簡単に言うと、カラオケボックスとゲームセンターとネットカフェぐらいしか若者の居場所がありません。さっき言った床屋さんなどでの学年を超えた交流が全くありません。そういうところが、いわゆる不良少年たちのたまり場になりやすい。もう1つは成功の筋道が非常に限られていて、そこから離れてしまうと元に戻れません。これも地方都市出身の人にしかわからないかもしれませんが、多くの地方都市では地元の1番いい高校に入って、地元の国立大学に入って公務員になるのが1番幸せだと多くの親がいまだに思っています。一旦そこから外れてしまうと、なかなか元の軌道に戻れません。東京とか大阪の方がフリースクールなどが完備しているし、世間の目もゆるくなっているので、一旦不登校などになっても、また元に戻るチャンスがいくらでもあります。今は大検もすごく受けやすくなっている。地方都市は上半身は近代的でも下半身はものすごく土着的ですよ。だからみんな理解があるふりをしていても、一旦不登校などになると後ろ指を指すようなことがまだまだたくさんあります。全国を回っていて感じるのは、高校にすごく格差があるということです。進学校のあり方が全然違います。今、東大、京大、阪大いずれも入りやすくなっています。子供の数は半分になっていますが、定数は増えこそすれ減っていないので、高望みをしなければ誰でも大学に入れます。ところがいまだに地方の進学校には地元の国立大学に何人入ったかを表に張り出しているような学校もあります。

一方で東京の中高一貫の私立の進学校は、たいていが大学に入っても学びのモチベーションが持続する教育をするということを打ち出しています。僕がやっているような演劇教育とかコミュニケーション教育の講座に来るのはそういう学校の先生方です。うちの地元でいうと筑波大付属駒場とか駒場東邦とかすごくいろいろやってくれています。駒場東邦は、この前「冒険王」というお芝居をロングランでやっていた時に昼間4ステージ買い取ってくれて、2クラス、80人ずつ4回で8クラス見に来て、そのあと僕が近現代史の授業をしに行き、1980年前後の世界の状況の話をしました。筑波大付属駒場はもっといろんな過激なことをやっていて、毎年のように青年団の演出部と新しい授業を作っています。ある年は中学3年生に夏休みに永山則夫死刑囚の小説を3冊読ませて、後期半年かけて永山則夫の評伝劇を作るという授業、それだけの国語の授業です。

筑波大付属駒場は選択科目があって生徒が授業を選べます。その選択国語で授業をやっています。そういう面白い授業をたくさんやって東大に入ってくる子たちと、地方の進学校で、単位未履修が一時間問題になりましたが、あれはいまだにどこでもやっています。この前阪大でびっくりしたのは、中高で1回も体育の授業を受けたことがない子がいたことで

す。その子は明らかにおかしくなっています。体をどう動かしていいかが全く分からないのです。大学の受験科目しか勉強しない。そういう子たちが一緒に入ってきて東大で机を並べて、特に女子の学生に多いのですが、不登校になってしまう子が出てきます。2、3年前にアエラが特集を組んだので読んだ人もいます。阪大でこの話をすると、阪大の大学院生でも必ず授業の感想で「私もそうでした」という子が2、3人います。地方から大阪とか京都とか東京に来て、ただでさえ緊張しているのに、周りの女の子の話が宇宙人が話をしているように感じるようです。今、東京の御三家などは親が金持ちだということもあって、高校時代からミュージカルやコンテンポラリーダンスを見に行ったり、ニュージーランドやオーストラリアに2か月留学していたり、多様な経験をしてから大学に入ります。帰国子女も多いです。ファッションセンスもいいです。昔は東大生はすぐわかりましたが、今はわかりませんよね。そうすると18歳の女の子にとってはものすごいショックだと思います。それまで神童だ天才だと言われて、絶対東大に行けるからこの科目だけやりなさいと親にも先生にも言われてせっかく入ったら周りが全然違う会話をしているのです。学力格差が問題なのではなく、文化的な格差によってものすごい差がついてしまっています。昔は、三四郎などの時代だったら地方の人は図書館に行って一生懸命勉強して見返せました。でも今は見返せません。企業もセンスのいい人から採用します。だから地方の人に逆転のチャンスはありません。友人で社会学者の宮台真司さんがよく言うのは、いまだにセンスなどに関係なく採用するのは公務員試験だけ、だから公務員がどんどん劣化していくということです。他のところは全部感性を問うような入社試験をしています。というわけで文化的な格差は非常な大きな問題です。秋葉原の事件と、前の年に会津で自分の母親の首を切ってそれをずっとカバンに詰めて持っていた高校生がいましたが、秋葉原の事件は青森高校です。会津高校は福島大学に入るより会津高校に入る方が難しいと言われているぐらい、地元ではそこに入るのがステイタスです。あの犯人の子は周辺の村の出身で会津若松市で下宿していました。これも東京ではあまりないことですが、地方の旧ナンバースクールみたいところは近隣の市町村から村1番の秀才がいまだにやってきて1人暮らしをします。村1番の秀才でも、高校に入れば普通か真ん中より下になってしまいます。秋葉原事件の彼もまさにそうです。そういうところに行かせておいて、親や周囲の期待もすごく強くて国立大学だけ目指して受験科目だけやっているような人間で大丈夫なのかということです。筑波大付属駒場に平田先生という国語の先生がいて、僕と一緒に授業を作っていますが、なぜ演劇の授業を始めようかと思ったかという、クラスに数学オリンピックで金メダルを取ったすごい天才少年がいたそうなのですが、数字にしか興味がなくて、お母さんが心配して、「うちの子は結婚できますでしょうか」と相談されて、これではいけないと、平田先生は演劇部の顧問だったので、演劇部だけではなく普通の授業でも演劇をやらなければいけないのではないかと思ったそうです。男子校で中高、男性だけで育つのでこれはおかしくなると思って、普通の授業の中でも演劇を取り入れたと言っていました。そういう余裕がある学校はいいのですが、いまだに数字で国立大学に

何人入れたというところでは演劇の授業を取り入れる余裕はありません。そういうのが地方都市ほど厳しくなります。人口 20 万人から 50-60 万人の中途半端な、でもほとんどの県庁所在地はその人口です。青森も盛岡も 30 万人です。弘前や鳥取は 15 万から 20 万人くらいで、その規模の都市の子供たちが 1 番息苦しい状態に今なっています。地方都市ほど厳しい状態になっていることを頭の中に入れておいてください。

ただこれは、実際には地方都市だけの問題ではありません。僕は駒場で生まれ育って渋谷が遊び場でした。渋谷は今でこそ修学旅行生がみんな来るような若者のメッカとされていますが、40 年前はものすごく汚い小さい町でした。今文化村があるところは私たちにとっては渋谷ではなく松濤です。あそこにデパートができた時、私たち地元の人間はあんな遠いところにデパートを作って誰が行くかと思っていて、渋谷駅からの無料バスが通り、小学校 2 年生ぐらいだったので毎日乗りに行きました。そのあとパルコができて公園通りという名前になりました。区役所通りという名前だったのを勝手に公園通りにしたのです。あんなおしゃれな街ではありませんでした。渋谷はもともとは世田谷にある陸軍の兵隊たちが週末に遊ぶような街なので、円山町のあたりには今もその雰囲気が残っています。あれが渋谷の全部だったと思ってください。今の 109 は 40 年前は焼け跡闇市の残りでマーケットが残っていて下北沢とか吉祥寺に少しだけ残っている雑多な地帯と同じ雰囲気だったのを再開発して作り変えました。渋谷は、渋い谷と書くぐらいで谷間の街なので広がりがない町です。これを東急と西武という 2 大資本の力で無理やり広げたのが今の渋谷です。これは悪いことではありません。経済が発展して人がたくさん来るのは悪いことではありません。しかし結果としてどうなったかということ、谷底のセンター街では、今はいませんが、チーマーと呼ばれる不良少年たちが地べたに座って非常に危険な雰囲気を醸し出すようになっていきました。一説によると歌舞伎町より危険だと言われています。歌舞伎町は組織犯罪なので近寄らなければ攻撃されませんが渋谷はいつ襲われるかわかりません。そこが渋谷の怖いところです。僕は通り道なので時々通りますが、彼らを見ると、でもこの子たちの責任じゃないだろうといつも思います。渋谷は資本の論理だけで街を急激に広げたために、ヨーロッパの街なら必ずあるような噴水のある広場とか公園が全くありません。公園は山手線から見える宮下公園が 1 つありますが、あそこはホームレスのたまり場になっていて若者たちが寄り付けません。今あそこは作り変えようということで紛争になっています。渋谷は資本の論理で広げたために社会的弱者の居場所が全くない町になってしまったわけです。でも社会的弱者は富に吸い寄せられるように集まってくるので、渋谷にどうしても集まってきてしまいます。そして居場所がないので右往左往することによって街の危険度がどんどん増しているというのが渋谷の現状です。

これの、もっとはつきり悲惨な形で現れたのが、これも 10 年ほど前ですが、東村山で起きた、中学生がホームレスを撲殺してしまった事件です。これは冬の寒い時期で居場所がなかったのでしょう、中学生とホームレスが図書館に行きました。図書館は日本では残念ながらまだコミュニティースペースではありません。ずいぶんそういう風に変えてきた図書

館もあるし、欧米の図書館はコミュニティースペースとしての役割を果たそうとしていますが、基本的に日本では図書館はまだ学習する場所です。だから静かにしなければいけない場所です。そこで中学生たちが騒いでホームレスがたしなめました。中学生が逆恨みして塾の帰りにバットでホームレスを撲殺してしまいます。これは明らかに中学生が悪いですが、その背後には、日本の、弱者の居場所を作ってこなかった都市政策の無策があると思います。

たとえばいじめの問題などでもあまり単純化しない方がいいのですが、街づくりという視点から言うとこのようなことが言えます。昔からいじめっ子もいじめられっ子もいましたが、昔はドラえもんの世界のように原っぱの世界があって、原っぱでもいじめられっ子はジャイアンみたいな存在からいじめられています、学年を超えた交流なのでジャイアンはガキ大将です。ガキ大将は子分がいじめられていると、自分も普段はいじめているくせに仕返しに行ったりします。これが子供にとっての重層性でした。今はガキ大将という言葉も仕返しという言葉もありません。子供も学校という社会しか持っていないので、ここでいじめられてしまうと逃げ場がありません。子供が塾に行きたがったり高校生がバイトしたがったりするのは、ほかの社会を求めていることだと思います。人間は1つの社会だけだともすごく息苦しくなってしまいます。では広場とか原っぱを作れば子供たちが帰ってくるかという塾やゲームで忙しいので帰ってこないと思います。そこで私たちは近代社会に合った新しい広場を作っていかなければいけません。その新しい広場というのが劇場や美術館や音楽ホールなのではないでしょうか。劇場は近代社会に合ったコミュニティースペースになっていかなければいけません。コミュニティースペースとは何かというと、経済的な原理では出会うことのない人たちが出会うということだと思います。ここでホームレスと中学生が出会い、外国人労働者と高齢者が出会い、障がい者と女子高生が出会い、そういう場所を作っていかなければいけません。経済原理からいうとこの人たちは出会わないのです。でもそういう人たちを出会わせることによって社会の重層性を確保していくことが、社会の安定につながるのではないかという考え方です。大事なことは、価値観が多様化しているので、行政がやらなければいけないことは、様々なメニューを用意しておくということです。前衛的なもの、大衆性のあるもの、国際性のあるものもあります。さまざまなメニューは行政だけでは用意できないので、皆さんの劇団も含めてNPOの役割が大きくなります。だいたいどの地域においても、その地域に生まれたから、地域の青年団や商店会や商工会議所や消防団に入って、夏は盆踊り、秋は祭り、冬は餅つき、春は福引きと全部の行事に参加させられるような強固な共同体は誰も望んでいません。しかし、どんな統計調査を見ても高度な芸術文化活動、スポーツ、ボランティア活動、環境保護運動といったものに関しては、車で30分圏内ならば人はストレスなく参加すると言われています。相当広域でも大丈夫だということです。半径20-30キロまで大丈夫です。大事なことは、価値観が多様化しているので、広域でできるだけいろいろなメニューを用意するということです。何かの活動を通じて、誰かが誰かを知っている社会を作っていくとい

うことが大事です。今までの地縁血縁型の、誰もが誰もを知っている社会から、趣味嗜好を通じて、誰かが誰かを知っている社会に日本社会を編み変えていかなければいけません。もしそれが必要だとすれば、編み変えていく編みの目の接点に芸術文化やスポーツや環境保護運動が多分あるのです。そういうことがコミュニティーの再生にとってはどうしても大事なのではないかということです。もっと簡単に言うと、あのおじいさんは気難しそうに見えるけどボランティアをやらせたらすごいとか、あのブラジル人はこわそうだけど子供にサッカーを教えたらすごくうまいというような、誰かが誰かを知っている社会を作らなければいけないということです。この文章は去年の秋に鳩山さんが所信表明演説の時にこのまましゃべりました。ちなみに1点官僚に直されました。怖いブラジル人というのは人種的偏見につながるのといつて、あのブラジル人はおとなしそうだけど、となりました。

これを僕は緩やかなネットワーク社会と呼んでいます。強固な地縁血縁型の社会から緩やかなネットワーク社会に日本を編み変えていく、編み変えていく1つの結節点として芸術文化があるのではないかと考えています。行政は30年50年あるいは100年に1度起こるかわからない災害に対してダムや堤防をたくさん作ってきました。必要なものもあったと思います。しかし災害が起こった時にもう1つ重要なのはコミュニティーの力です。僕は今関西で教えているのでこのことはすごく説得力を持つのですが、神戸の震災の時に復興が早かったのはコミュニティーの力が強い場所です。震災の時にまず避難所に行きますよね。避難所から仮設住宅に移る段階で、神戸の時には行政側も経験がなかったので、とにかく急を要する人、高齢者、障がいを持った人、そういう人たちからどんどん機械的に仮設住宅に入れていきました。その結果コミュニティーが完全に寸断されて、結局四百数十名といわれる孤独死、まったく誰にも看取られないで死んでいく孤独死というものを生んでしまったのです。その教訓から中越地震の時には山古志村の人は山古志村ごと仮設住宅に入りました。ちゃんと変化があるのです。そのようにコミュニティーの力というのはとても大事です。でも実際にはコミュニティーの力が衰えているどころか、ないと言ってもいいぐらいです。だからこれをどうにかして芸術文化やスポーツの力で、昔のような強固な力にはならないかもしれませんが、新しい現代社会に合ったやり方で再生していかなければいけません。文化以外に何で人間は結び付くのでしょうか。地縁血縁はもう無理です。では何によって結びつくのかという問いかけです。こんなことを10年前に言ってもほとんど誰も相手にしてくれませんでした。ところが驚いたことに2年ほど前に総務省の消防庁の諮問委員になってくれという依頼がありました。劇場経営者としては消防庁の諮問委員は断れないので、もちろん引き受けました。なぜ諮問委員会に呼ばれたかという、全国の消防団の組織率が下がっているからどうにかしなければいけない、たまたま消防庁の担当だった人がその前、前回話した地域創造の財団の職員だったのです。地域創造と消防庁は、総務省の同じ管轄です。それで呼ばれました。防犯も僕はやっていますが、防災とか防犯は、防災教育とか防犯教育だけを単体でやったり単体で活動するような時代ではない

のです。子供たちに演劇やミュージカルやダンスやサッカーや野球をやらせたりしながら、時々その中で防災訓練をやればいいのです。その方がコミュニティーの再生への近道です。欧米のスポーツクラブなどはそうです。サッカーだけとか野球だけのスポーツクラブはなく、シーズンごとにスポーツの種類も変えて、コミュニティーの大事な教育機関でもあって、夏はキャンプに行ったりします。サッカーや野球のためのクラブではなく、コミュニティーのためのクラブなのです。そういう集団がこれからはたくさん必要です。僕はもちろん演劇をやっているから、芸術や文化が大事なのではないですかと言いますが、決して絵空事とか理想論を言っているわけではありません。1980年代以降、欧米の多くの都市は文化による都市の再生に取り組みます。アメリカだと車社会なので、車をシャットアウトしたり道を曲げてスピードが出ないようにしたり、大きな都市だと大きな駐車場を郊外に作ってトラムを走らせたりして、弱者にやさしい街づくりをまずします。それ以外にだいたい街の真ん中に大規模な芸術文化施設を作ります。ここでマイノリティーの人たちが社会参加しやすい施設にしていくのです。アメリカの場合、ヒスパニック系やチャイニーズ系の移民、障がい者、高齢者、シングルマザーといった人たちの意見を聞いて施設を作る。日本も今、どの文化施設もたいてい住民の意見を聞いて準備委員会などを作ります。いわゆるガス抜きと言われるものです。作るのですが、だいたいピアノの先生、踊りのお師匠さん、生け花の先生などの意見ばかり聞いて、その人たちに使いやすいようなものにしてしまいます。最初の講座で話したように貸館中心なので、この人たちが使いやすいのが1番収益が上がるからいいのです。でも実は、この人たちは活気のある施設を作れば勝手に使ってくれるし、実際にはこの人たちの力を地域住民に還元していくような施設にしていかなければいけません。富士見市の場合は、今のサポート委員会のメンバーはこの人たちで、最初はキラリ☆ふじみをどうやって使おうかと考えていた人たちです。それが僕が来てからの5年間の活動の中で、ほとんど応援団の方に回ってくれて、地元の実力者なのですごくいろんなことをやってくれています。富士見は農村地帯と重なっていて、大地主さんがメンバーの中に何人かいます。巨大な家を持っていて、キラリ☆ふじみで作品を作った時に役者を泊めてくれたり、「別れの歌」というロアン・グッドマンが作った作品の時には日本の旧家が舞台だったので、そういう家が1軒だけ残っていて、それを隅々まで見学させてもらったり、本当に献身的にサポートしてくださっています。宮城さんも言っていましたが、この層を取り入れることが大事です。残念ながら日本ではまだ弱者の意見を取り入れて劇場づくりに反映することはまだまだ全然できていません。本当は弱者が社会参加をしてくれる場所にしていくことが大事です。

1番典型的なのが、今ヨーロッパの多くの劇場でやっているホームレスプロジェクトというものです。これはホームレスの方たちに1か月に1回ぐらいシャワーを浴びてもらい、バザーで集めた服を着てもらい、コンサート、演劇、オペラなどに招待します。先進国には生まれながらのホームレスはあまりいません。何らかの理由でホームレスに転落してしまうわけで、経済的な理由が1番ですがもう1つは精神的な理由で、働く気力がなくなって

しまします。そこで、100人がオペラを見て、5人でも10人でも、親父がオペラが好きだったとかおふくろがよくコンサートに連れて行ってくれたということで、生きる気力を取り戻し、働く気になってもらえれば、これはものすごく安上がりなホームレス対策です。命を救うには炊き出しをしなければいけません、先進国では炊き出しだけでもホームレスの問題は解決しません。どうかして社会参加をしてもらわなければいけないわけです。これは経済あるいは経営の原則にもそんなに外れたことではありません。よく劇場を運営するのは飛行機を飛ばすのに似ていると言われます。飛行機を1機飛ばすのに、満員でも乗客が1人でもそんなにコストは変わりません。演劇も満員でも観客が1人でもあまりコストは変わりません。どちらも稼働率を計算して、公演回数や1日に何便飛ばすかが決まります。だいたい飛行機の場合は今60-70%で設定しているはずで、60%を切ると、1日4便だったのが3便に減らされたりします。70-80%になるともう1便増やしても大丈夫という経営判断になります。演劇も同じです。演劇は計算しにくいですが、公共ホールの場合、有料入場者数が60%ぐらいがいいのではないかとされています。これも第1回目で説明しましたが、日本の場合、初演ですべての資金を回収しなければいけないので、どうしても80-85%という世界水準からみると間違い沙汰の数字を設定しなければいけないので、テレビ俳優などを使わなければいけません。ロンドンもロングランは少なくなっていますが、ロングランシステムをやっているところは、最初だんだん上って行って、何%かを超えるとロングランが決定して、ロングランが始まって頂点を過ぎるとだんだん減ってきますが、40%ぐらいまで耐えられるらしいです。初期投資が終わっているので、劇場の4割が埋まっていれば採算が取れるそうです。だから4割を切るまではずっと公演を続けられます。そのうちキャストを入れ替えたりして盛り返すものもあります。それでもだめなら公演終わりです。これが本来の演劇界の稼働率の意味です。日本ではまだそのメカニズムが働いていないのです。ということは逆に言うと3-4割は客席は空くのです。空くことを前提にして私たちは経営をしているはずなのです。だから航空会社は空いた3割の席をどうやってほかのサービスに回すかを競うのです。だからマイレージサービスという特典が得られる。公共ホールは残りの3割をどうやって公共サービスに回すかを競うべきなのです。今回は子供向けのお芝居だから母子家庭の人は招待しましょうとか、今回は働く意欲が出そうなお芝居だからホームレスや失業者の人を招待しましょうとか、今回は絶対障がい者に見てもらおうというように回すべきなのです。しかし日本ではこれさえできません。こういうことをやろうとすると必ず文句を言う役人がいます。これはお金を出してチケットを買っていただいた方に不平等になりますと言うのです。「公」というものが全く分かっていないで、劇場の運営をしているとこうなります。これは平等でも何でもありませんよね。芸術文化が公益、公の益になるということが全く概念としてないのです。ただ問題が起きないようにしようとしているだけなのです。そこをどう使っていくかということが大事なのです。アゴラ劇場は、去年の4月から、失業者、雇用保険受給者に対して大幅な支援会員の減免をはじめました。これはヨーロッパの劇場ならどこでも行っている

ことです。フランスなどは7割引きぐらいにしていると思います。だから2000円のチケットでも、失業者なら300-500円で見られます。日本の今までの政策は全く逆でしたね。雇用保険受給者がお芝居を見に行くと、求職活動をしていないと言って雇用保険を打ち切られるような政策をずっとしてきました。このマインドをまず逆転させないとだめです。これはとても重要なことで、こういったものをソーシャルインクルージョン、社会的包摂、あるいは社会包摂と言います。社会包摂とはどういうことかという、1回目で少し説明しましたが、高度経済成長の時は景気の変動はあっても、失業しても再就職の口はありました。でも今は1回失業してしまうとなかなか再就職はできません。最初のうちは頑張っただけでハローワークなどに通うのですが、だんだん精神的に参ってきてしまい、そのうちに近所の目などもあって引きこもってしまいます。そうするとどんどん閉鎖的になってしまいます。最悪のケースは孤独死です。今、老人だけではなく中高年の孤独死が問題になっていますね。孤独死は社会的なリスクもコストもものすごく高いです。物理的に臭いが残ってその部屋はしばらく使えないし、不動産価値が大きく下がってしまいます。近所の人たちのショックは、私たちには想像がつかないほど大きいそうです。近所の人も引越してしまったりします。とにかく人間を孤立させないということが成熟型の社会にとっては大事です。成長型の社会は放っておいてもみんな社会参加できますが、成熟型の社会は放っておくと社会からはじき出された人がどんどん孤立してしまいます。だから社会包摂というのは、孤立させないために、何でもいいから社会参加してくれという考え方なのです。インクルージョンというのは要するに巻き込むということです。どうにかして人々を社会に巻き込んでいくのです。そのためには演劇でも音楽でも美術でもボランティア活動でも環境保護運動でもスポーツでも何でもいいから使いましょうということなのです。これが社会包摂の基本的な考え方です。社会包摂を考えるときには、文化は非常に大きな役割を果たす。

文化による都市の再生の1番成功した例はフランスのナントだと言われています。ナントは大西洋岸の街で昔は造船業で非常に栄えていました。フランスでナンバーワンの造船業の都市でしたが、1960年代以降、日本と韓国の造船業にやられて、壊滅的な打撃を受け、生産量がほぼ0になってしまいました。失業率は二十数%になりました。ものすごく街は荒廃しました。そのときに30代の若い市長が登場して、文化によってナントを再生させると宣言しました。その時は誰も信じなかったそうです。もっとも文化的ではない、ものすごく荒んだ街だったからです。街の真ん中に大きなビスケット工場がありますが、日本ではビスケット工場と紹介されていますが、遠洋航海用の乾パンの工場でした。遠洋航海自体がなくなったので、いらなくなって潰れてしまったこの巨大な工場をアートスペースにしました。劇場、スタジオ、画廊、稽古場があります。その周りの空いているアパートを市が買い上げて、パリからどんどん若手のアーティストを呼んでタダで住ませ、ナントは芸術家に最もやさしい町というイメージを作りました。クラシックの好きな人は「ラ・フォル・ジュルネ」というのを知っていると思います。熱狂の日々と訳され、いま日本では

有楽町でゴールデンウィークにやっていますね。あと仙台市とかびわ湖ホールでやっています。3日間、モーツァルトならモーツァルト、ベートーベンならベートーベンを集中的にやって、1つのコンサートがだいたい1コインで見られ、10も20もコンサートが一遍に見られるという新しいスタイルの音楽祭をはじめました。これを今輸出していて、日本のラ・フォル・ジュルネは企画自体をナントから買い取っています。それから去年の横浜開国博で、蜘蛛の巨大オブジェがありました。ああいう巨大オブジェのカーニバルもナントで始まったのです。そのようにしてナントはフランスでもっとも文化的な都市というイメージを作りました。その結果ナントは毎年、ル・モンドとカリベラシオンが行う老後に住みたい街の調査のナンバーワンにランクされるようになりました。これはとても大事なことで、この間高萩さんも言っていたように、高所得者が住むということは自治体にとってとても大事なことです。特にフランスの場合はパリは古い街でエレベーターやエスカレーターが後からはつけられません。だから金持ちのお年寄りは引退するとだいたい地方都市に住みます。しかもフランス人は孫と住みたいとか故郷に住みたいなどとあまり思わないので、55歳ぐらいでリタイアして元気なので、当然音楽の好きな人なら音楽の街、演劇の好きな人なら演劇の街に住みます。ナントは気候も温暖なのでどんどん高所得者が集まってくるようになりました。不動産価値が上がってどんどん固定資産税収入が上がって、またそれを文化予算に投入するというで街が再生したのです。最終的に製造業、造船業も再生しました。ナントというブランドイメージが確立したので、ナントで作る高級クルーザーが売れるようになったのです。ナント製というだけでかっこいいというイメージになったので売れるようになりました。これがナントモデルと言われる、文化による都市再生の最も有名な例です。ヨーロッパでもたいてい、ビルバオとかリバプールとか、だいたい重厚長大産業の街の方がそういったものに取り組んでV字回復をする例が多いです。だから日本で北九州ががんばっているのは決して根拠のないことではありません。川崎もそうです。イメージを回復するにはそれしか手がないのです。中途半端なところがダメなのです。これが海外の例ですが、日本はどうかということをお話したいと思います。観光の例を話して、それから質疑に入ります。

今日説明するのは、去年の12月に国交省の成長戦略会議でプレゼンをした時の内容です。多くの演劇人が、なぜ私がある種の政治的な権力を持っているかということについて疑問や不審に思い、取り入っているのではないかと思っているようです。私にもそう思われているという自覚はあります。ただ、私からすると、それは全く政治とか行政のシステムを知らない、日本の演劇人は本当に子どもだということです。なぜ僕が今のポジションにあって、いろんな政治家や官僚が僕の意見に耳を傾けるのかというと、単純に言えば、たくさんさんの政府の諮問委員会をこなしてきたからです。ある種の政治学者や社会学者も同じです。1番最初に政府の諮問委員になったのは31歳で、地域創造の立ち上げの時の諮問委員会です。その時に出したレポートは「現代口語演劇のために」か「都市に祝祭はいらない」のどちらかに入っていると思います。今読んでもそんなに間違ったことは書いていないと

思います。当時は若かったのもう少し突っ張ったことを書いていたと思いますが。

宮城さんも近いことを言っていたと思いますが、やるなら全身全霊を傾けてやらないとだめで、たいていの学者たちは諮問委員会に出ると官僚の言いなりになって、はいはいと言いますが、そこで本当にやりたいことがあるなら緻密な文章を書いたりプレゼンをしなければいけません。当時地域創造を作ろうとしていた若手の官僚がいて、僕も初めてだったので意図したわけではありませんが、けっこう真剣にやりました。最後の諮問委員会の打ち上げの席で何人かの若手の官僚が寄ってきて、もう少し話を聞きたいから別に席を設けるので勉強会をやらせてくださいと言われました。その人たちとはいまだに友情が続いています。そういうことがとても大事で、その積み重ねで今の私のポジションがあるので、うまくやったわけでも、とりいったわけでもありません。そのぐらいの苦労はしているつもりです。先ほど言ったように消防庁の諮問委員会まで行きました。消防なんて直接、表現活動とは関係なくても、ちゃんと毎回真剣にやって、良心的な官僚との信頼関係を作っていくことが大事です。皆さんに、そうしろと言っているわけではありません。でも仕組みを知っておくことは大事なことです。

去年の12月に国交省で成長戦略会議ができました。国交省の成長戦略分野は5つありました。1番新聞で話題になったのが空港です。特に関空をどうするか。関空をどうするかまで僕が話さなければならぬのですから大変ですね。それから港湾施設をどうするか。ますますわかりませんね。でも、港湾行政、空港行政のことは、劇場行政に似ている部分があるので、とても勉強になりました。共通点は、作りすぎてしまったということです。それから住宅部門。そして国際部門、日本の新幹線などをどう売っていくのかです。あと観光の5分野です。僕は観光部会の座長をやらされて、この半年間ものすごく観光について勉強しました。今僕は日本で1番観光に詳しい劇作家だと思いますが何の役にも立ちません。そこで僕なりに考えたのがこれから話すことです。

観光学の世界では大阪病という言葉があります。大阪病というのは、万博の成功体験があまりに大きかったために、大規模集客型のイベントにずっと頼るような街づくりを大阪がしてきたことです。今、上海万博が大阪万博を抜いて7000万人を目指すと言っていますが、人口が1000万以上なのに何百万かしか大阪より増えないのです。大阪万博には6400万ぐらい来ました。気違い沙汰です。ほぼ国民全員が行ったのです。僕は小学校1年生で、僕も行くはずだったのが父親の都合で行けなくて号泣しました。そんなイベントは近代国家の形成上数回しかありません。そのように本当に成功してしまいました。その後に花博というのがありましたが、バブルの真ただ中で、決して成功した博覧会ではありませんでしたが、集客と、企業がお金が余っていたので資金が集まりました。それで問題が先送りにされてしまいました。明らかに80年前後から大阪の衰退がはじまっていたのに、問題が先送りになりました。過去の成功体験にとらわれてしまったことと、問題を先送りにしてしまったという、企業だったら典型的にダメなケースが大阪なのです。結局どうなったかという、皆さん忘れていますがオリンピックをやるとうしました。今ならできるわけな

いだらうと思いますが、大真面目に来ると思っていたのです。それで負けて、サミットも来ず、世界陸上は失敗し、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン (USJ) も今一つ元気がありません。USJ も頑張っているのですがディズニーランドに比べると圧倒的に弱いです。よく今観光の世界では同心円状の集客ということが言われます。地元の人に来てもらえるような観光施設じゃないと勝てないのです。ディズニーランドは浦安市民が 1 番年間パスポートを持っています。浦安市の中学校の校長先生は全員持っているという噂があるぐらいみんな持っています。都道府県別では千葉県民が 1 番持っています。浦安の人たちはディズニーランドを誇りに思っているので、全国から友達や親戚が来ると一緒に行くのです。年間パスポートを持っていて何度でも入れるので一緒に行って案内して、アトラクションは一緒に行ったり、行かないでレストランで待っていたりするという構図です。USJ は大阪の人たちは行きません。だからリピーターが少ないし、リピーターが来られるような状況になっていません。しかも USJ がそこで間違っただけで、リピーターを呼ぶためにアトラクションの質を上げるのではなく、変なアトラクションをどんどん増やしました。兵力を小出しにするという戦争では 1 番やってはいけないことをやって、USJ なのにウルトラマンがいたりしますよね。USJ ではなくなってしまうました。だからブランドの質がどんどん下がって地元の人が全然誇りを持ってない状態になってしまいました。それが USJ の今の状況です。

大阪もダメなばかりではなく、大阪で最も成功したのが天神橋筋商店街の天満天神繁盛亭というところなんです。この繁盛亭は、60 年ぶりに復活したと言われる大阪で今唯一の寄席です。寄席なので 1 回に 200 人しか入れません。昼夜興行を打ちますが 1 か月先まで満員で予約が取れませんが年間での動員は十数万人にしか過ぎません。それ以上入れないからです。甲子園球場 3 試合分にしかならないのです。ところがこれが成功したおかげで、もともと天神橋商店街は元気がよかったです。ますます元気がよくなって、いま日本で最も活気のある商店街と言われています。1 日の通行客 2 万 5 千人、これは嘘じゃないかと思っていますが、2 万 5 千人いると言っています。だから年間で 800 万ぐらい通っているのです。ものすごく長い商店街なのでちょっと寄った人も全部カウントしているのだと思います。面白いのはくだらないイベントを毎日のようにやっていることです。修学旅行生の 1 日丁稚体験はまだいいのですが、商店街を端から端まで歩いた認定証「満歩状」の授与とか大阪のガラス発祥地を再認識する「天満切子の復活」とか「大道芸選手権の開催」などはまだましなほうで、もっとくだらない小さいイベントをたくさんやっているとにかく集客をします。でもなんで元気になったか、商店街の会長さんに聞くと、何が 1 番変わったかということ、繁盛亭ができて若い唄家さんたちが寄席が終わった後に商店街の居酒屋で飲むようになったそうです。そこで仕事の終わった商店主と飲んでバカ話をしている間にいろんなアイデアが生まれるようになりました。それで元気になったということです。さっきも言ったように商店街はポテンシャルはあるのです。だいたい商売がだめになったから店を閉めるのではありません。後継者がいなくて店を閉めるのです。続けられるのに元気

がなくなって店を閉めるのです。だから元気を出してアイデアを出していくことが大事です。この繁盛亭は商店街の旦那衆が 2 億円の寄付を集めて天満宮の空いている境内に建てた寄席です。自分たちのお金で建てています。だからものすごく愛されている施設で、みんな応援しています。そこが 1 番の違いです。

それから水都大阪というのがあります。水都大阪は本当に大変でした。僕も多少関わっていましたが、美術系の僕の友人たちがみんな関わっていたのですが、大阪府と市と財界が 3 億円ずつ出して 9 億円でやるという話だったのが、大阪府が一切出さないと 1 回言い出して、そうすると他も出さないと言い出してどんどん予算が削減されて、最初の予定がどんどんできなくなって、全部アーティストにしわ寄せが来ました。とにかく名目をつけるためにワークショップ型とか参加型にしてくれと言われて、ただしそれは結果的に集客につながってとてもよかったのです。ただ本当に禍根も残して、大阪市の平松市長は会うたびに水都大阪が成功したものだから安くてもできるなどと言いますが、アーティストはものすごく苦勞してやったので「次はだめですよ」といつも言っています。そういう悪い点もありましたが大成功しました。想定入場者数が 100 万人だったのが 190 万になりました。横浜の開国博は 500 万人を予定していたのが 124 万人で、市長は逃げてしまいましたね。総事業費が 150 億円と桁違いです。水都大阪に橋下知事は予算を出さないと叫ぶたぐせに 4 回も来たそうです。滋賀県知事なども呼んで威張ったらしいです。このように成功例もあります。

さっきナントの例を挙げましたが、日本で最も文化政策によって成功した例が金沢 21 世紀美術館と言われています。妹島さんの設計です。兼六園の動員は平成 15 年が 177 万人、以後 168 万人、164 万人、162 万人となって、平成 20 年は 182 万人です。それに対して 21 世紀美術館は平成 16 年開業で、もう 17 年には実質初年度で 146 万人、それから少し減りましたがまた増えて今 156 万 8 千人で兼六園にほぼ追いつきます。ということは、金沢に来る観光客で兼六園に行かない人はまずいないと思うので、ほぼ両方必ず行くような施設にまでなっているということなのです。この結果どうなったかというと、金沢市の宿泊客は平成 14 年が「利家とまつ」が放送されて回復し 227 万人でした。翌年が 200 万人で下がっていますが、平成 16 年の 21 世紀美術館の開業から上がって行って、今は 237 万人で「利家とまつ」の年を超えました。大河ドラマに勝ったということです。大河ドラマは 1 年しか効果がないのです。V 字回復には 21 世紀美術館以外に要因がありません。だから 21 世紀美術館のおかげで観光都市金沢が復活したのです。金沢はずっと兼六園だけに頼って観光政策を行ってきましたが、みんな海外旅行に行くようになってしまい、観光都市としての金沢はジリ貧でした。これが 21 世紀美術館のおかげで V 字回復をしました。でも 21 世紀美術館も決して外の集客だけをやってきたわけではありません。この背景には金沢市民芸術村という 24 時間利用可能なスタジオ群でさまざまなプレ事業を行ってきたことがあります。金沢市民芸術村は非常に変わった施設で、紡績工場の跡地を、建築も非常にいい建築があったので、それを残して、音楽と美術と演劇の稽古場施設にしました。24 時間利用可

能です。6時間単位で4分割していますが、6時間で300円です。全部NPOが管理しています。普通の公共施設ですが、10時になると警備員の人しかいなくて、あとは市民の自主管理です。300円というのはどうやって決めたかという、芸術村の村長さんは行政からきている人ですが、金沢フィルを作った担当者だったので非常に芸術を愛している人で、次にここに来たのですが、市長に相談したら、市長が芸術に関心の高い人で、プールの利用料と同じでいいだろうということで、6時間300円になりました。深夜もずっと使えて、壁が厚いのでいくら音を出しても大丈夫です。

それから商店街や学校などでのアウトリーチ活動を開館前からやって、今もしています。それから、行った人はわかると思いますが、コンテンポラリーアートなのですが、体験型参加型の作品が非常に多いので子供などでも楽しめます。市内の小中学生の鑑賞教育も徹底的にやっています。金沢市内の子供は小学校4年生で全員行きます。いろいろ考えた末に小学校4年生にしたらしいのですが、3年生以下だとちょっとわからないし、6年生ぐらいだと生意気になって嫌いになる子もいるので、4年生が一番洗脳しやすいだろうということで4年生にしたらしいです。市の方針として全部やっています。これが金沢の成功例です。

次は富良野です。2008年ぐらいの市町村の好感度ランキングで上から函館、札幌、京都、横浜、神戸、小樽、鎌倉、そして富良野です。その次が金沢です。ベストテンの中でほとんどが歴史的な都市や文化財を持っている都市ですが富良野だけが突出してここに入っています。毎年5位から10位ぐらいに必ず富良野は入っています。富良野は1つはもちろん「北の国から」のイメージがあると思いますが、もともと観光地だったわけではありません。富良野が観光地になったのは1975年以降です。もともとは全くの農村でした。ラベンダーが主な産業で、ジャガイモやカボチャもたくさん作っていますが、ラベンダーはもともと香水の原料でした。ところが1970年以降、人工香料が開発され、ラベンダーがなくなります。ラベンダー畑の耕地面積が激減し全部潰されていきます。ところが富田さんという変わった農家が1面だけ潰すに忍びなくて、畑を取っておきました。それが当時の国鉄のディスカバー・ジャパンのキャンペーンのポスターに採用されて、そこから火がついて写真家たちがこの季節に撮りに来るようになって、その翌年ぐらいに「北の国から」の放送が始まって一気に富良野ブームに火が付きました。でもさっきも見たようにテレビの効果は本来は1年だけのはずですが、ラベンダーというアイテムがあったので毎年来るようになりました。富田さんはただ単に畑を見せるだけではなく、ラベンダー摘み体験とか香水工場の見学とかさまざまな体験型の観光産業をはじめました。その後に富良野プリンスができて、スキー場がどんどん整備されてスキー客が来て、冬も集客が見込めるようになったというのが富良野の流れです。富良野は私は今年度も行きますが、7、8年毎年呼んでいただいています。富良野市内の全部の小中学校でモデル授業をしてきました。倉本聡さんの富良野塾の卒業生の何%かが農家の人と結婚したり、いろんな形で残っています。だから演劇を体験した人が残っていて、僕がモデル授業に行くと、彼らがアシスタントに

ついて僕の方法論を学んで、今は彼らが小中学校で授業をするようになっていきます。

なんと富良野は平成 25 年度に北海道内で初めて道立高校で演劇コースができます。札幌にも旭川にも、まだ演劇科はありません。富良野という人口 10 万人に満たない小さな町の高校に唯一演劇コースを作るのです。ここは演劇と観光でやっていくという覚悟が決まっているわけです。面白いのは、富良野で授業をすると、例えば六郷中学校という北の国からにも出てくる小さな中学校があります。全校 15 人なので 3 学年一遍に授業をします。そうすると見学者が 30 人ぐらい来ます。生徒の両親が、お父さんも農作業を休んで見学に来るのです。どういうことかということ、富良野の人たちは自分たちは農家だし、自分の子供にも農業を継いでもらいたいけれども、これからの日本の農業は付加価値と生産性を高めて、高い価値の商品を作って売っていかないと絶対に勝てないということを成功体験として知っているのです。彼らは第 1 次産業が第 3 次産業に転換した成功体験を持っているから、ブランドイメージで勝負していかねばいけないということがわかっています。だから発想とか柔軟性とかコミュニケーション能力が百姓ほど必要だと本当に思っています。これはすごい力です。それでみんな見学に来ます。演劇教育などはウェルカムの状態です。これが富良野の状況です。実際に富良野ブランドはものすごい力を持っていて、富良野かぼちゃとか、北海道内の他の農産品に比べて 1.2、3 倍で売れます。もちろん無農薬などの厳しい基準を課していますが、ブランドイメージが非常に強いのです。富良野メロンもそうです。今お取り寄せナンバーワンと言われている富良野プリンというのがあります。これも富良野出身の人が作ったのではなく、愛媛出身のパティシエが全国を回って、やはり富良野が安定的に無農薬の原料が得られるということとブランドイメージがいいということで、富良野の真ん中に工場を作ったのです。そしてレトロ調の、昔ヨーグルトが入っていた瓶にプリンを入れて売り出したら爆発的に売れて、3 年間で 700 万本くらい売れました。最大のヒット商品です。これも富良野プリンという名前で売れたわけです。さっきのナントブランドと一緒にブランドイメージを確立すると何を作っても売れる。

富良野の隣に芦別という街があります。富良野があつて芦別があつてその下に夕張があります。芦別は大変なことになっています。世界最大の五重の塔のホテルがあり、横に三十三間堂そっくりのホテルがあります。あと大観音があります。大観音と五重塔を結ぶ 150 メートルのモノレールが走っています。もう動いていません。それから回転する聖徳太子があり、現代アート風な橋も架かっています。それから第 3 セクターで破たんしたカナダ村があります。全部一望できます。富良野から芦別の人に冬に連れて行ってもらって、この惨状を見てくださいと言われました。これだけのものがあつて人っ子 1 人通っていませんでした。よく浅草に行くと東京観光の記念に東京タワーと観音様と全部が一遍に入っているペナントみたいなものがありますよね。あれそっくりなのです。それで人っ子 1 人通っていません。どういうことかということ、これは 1990 年代に全部、東京のデベロッパーに騙されて作ったものですね。芦別は旧産炭地です。夕張は昔石炭が取れた街です。旧産炭地にはいろいろな振興策があつて、潰れた石炭の街にはどんどんお金が稼ぎ込めるように

なっています。主には地方債という債券を発行する権利を国が保証して認めるのです。その代り後で地方交付税で補てんしていくというのが地方債の考え方です。さっきの五重塔などは全部地方債で作っていくわけです。それとバブルの頃、中曽根政権の時のリゾート法が絡まってカナダ村のようなものがたくさんできました。でもここにお客さんが来るわけありませんよね。富良野にはこんな建物は1つもありません。富良野は今、北海道で最もにぎわっている街で、観光客の半分は外国からのお客さんです。だから「北の国から」で来ているわけでもありません。スキーとラベンダー畑で来るのです。芦別と富良野は隣町です。スキーをやる人に言わせると富良野や苦務で滑ると、世界で最も寒くて湿度が低いからパウダースノーになるので滑りやすく、級が1、2級上がったように感じるそうです。芦別や夕張も同じはずです。芦別は富良野より利点もあります。旧産炭地なので温泉が出るのです。しかし全然お客さんは来ていません。何を間違ったのかというと、自分たちの価値を自分たちで決められないと、あっけなく東京資本に文化的に収奪されるということです。同じ条件なのに間違ったものを建ててしまった。まず自分たちの価値、それから自分たちの価値にどういう付加価値をつけていくかということを決められなければ、東京資本はハイエナのようにお金のあるところに群がって根こそぎ持って行って、後は知らんぷりです。地方は衰退するに決まっています。もう1つは芦別は自分の金ではなかったということです。繁盛亭は自分の金です。だから地元の人が愛するのです。芦別は全部地方債という借金で作っている自分の懐は痛んでいません。だからこんなものを作っても何も感じなくなってしまうのです。美しい風景の中にこんなものを作ったら痛みを感じなければおかしいはずですが、でも人の金なので感じなくなってしまう。その時に土建屋さんだけ一瞬だけ潤うからです。これが芦別の現状です。自分たちの地域のポテンシャルを自分たちで決められるかどうかということが地域にとって大事なことです。これを僕は文化の自己決定能力と呼んでいます。文化の自己決定能力がない街は滅んでいきます。あるいは東京資本にあっけなく収奪されていきます。文化的に収奪されていきます。センスの違いということです。センスとか情報は今、東京に一極集中していて、この力によって資本は容赦なく収奪していく。では文化の自己決定能力をどうやってつけていくのかというと、子供のころから高い水準の芸術文化に触れさせていく以外にありません。あるいは国際性を身につけさせて世界標準の芸術や文化の水準がどうなっているかということを体に覚えさせていく以外にありません、と僕はいつも説得しています。もしそうであるとするならば、放っておいたら東京や大阪に住んでいる子供たちの方がそういうものに接する機会がいくらでもあるので圧倒的に有利です。地方では公共ホールがそれを提供しなければ子供たちにはそんな機会は1回もありません。今までは地方は自然が豊かで人情があって子供たちはすくすくと育つと思われてきました。でも結果としてそうなっていません。犯罪はどんどん地方都市に広がっています。消費社会は地方都市にほど荒々しく働くからです。そこを救うはずの精神活動は公的なもので保証されない限り、地方ではそれに触れる機会はあります。東京や大阪の方がそれは保証されています。そうであれば精神的にも

経済的にも大都市の方が有利になるに決まっています。そのままでいいのですか、という問いかけなのです。これが僕が考えている文化の自己決定能力ということです。

もう 1 点は、かつては公共事業をやれば少しは地方は潤いました。公共事業をやることによって出稼ぎがなくなりました。僕の子供のころまで出稼ぎをするのは普通でした。それが田中角栄以降、出稼ぎはなくなりました。それは公共事業の偉大な功績でした。しかし 90 年代以降は日本全体が消費社会に変わって、最終消費の部分で東京資本が握っているため、公共事業をやっても砂漠に水を撒くように、お金がすぐに東京に吸い取られていってしまうのです。昔は公共事業をやれば土建屋さんがまずは儲かり、その人たちが地元で消費をして商店街が潤い、街の Snackbar が潤いました。でも今、人びとは、東京資本のコンビニで物を買って、東京資本のショッピングセンターで物を買うので、1 回も地元でお金が落ちないうちに全部、入ってきたお金は東京に吸い上げられてしまうのです。たとえば先ほど話した地方債は総額でだいたい 200 兆円あると言われていて、そのうちのどのぐらいの債権が焦げ付いているかは今誰にもわかりません。政府や自治体も隠します。政権が変わったり首長が変わったりして耐えられなくなるとようやく判明します。200 兆円のうち、銀行取引でいうところの要注意先、もうこれ以上は貸せませんという自治体が抱えていて国が保証しない限り返せない不良債権が 40-80 兆円と言われていて、これがどういう数字かというと、バブルの後に銀行が不良債権を作って、これを国が保証し、公的資金を注入しましたが、この総額が 80 兆円ぐらいです。バブルで銀行が湯水のように不動産投資し、不動産投資に金を貸し、そのあとで全部資産価値がなくなって銀行の借金になり、銀行が作った 80 兆円の借金を国が肩代わりしました。一方で 90 年代に公共事業のために地方債で地方に 80 兆円の借金をさせました。そのあと小泉政権になって交付税を止めたので地方はお金を返せなくなり、夕張は破たんしました。バブルで銀行員たちが六本木で飲んで全部使ったお金の借金を、回り回って全部地方に肩代わりさせたということです。自民党が選挙に負けるのは当然です。公共事業で流したお金が全部ゼネコンとか最終消費のショッピングセンターなどに吸い上げられて東京にやってきて、東京の企業が銀行に預金し、低利なので銀行は儲かり、銀行はそのお金を政府に返せました。残った借金は地方だけです。借金を付け替えただけです。これが日本の現状です。だからいくら公共事業をやっても地方は潤いません。今、どの地方都市も地産地消と言って、自分たちで作った農産品は自分たちで消費し、地方で経済を回そうとしています。こんなにエンゲル係数の低い国で農産品だけ地産地消しても全然経済は回りません。そこで僕が提唱しているのは「ソフトの地産地消」ということです。消費社会なので、私たちが人生を楽しんだり他人に喜びをもたらすものを自分たちで生み出し、自分たちで消費しないとお金は回りません。食料品にかけている値段はそれほど大きくありません。パチンコに使えばパチンコの機材メーカーに吸い上げられてしまいます。そうではなく、自分たちで作って自分たちで楽しみ、自分たちでお金を回していくようなソフトの地産地消が必要だとずっと言ってきました。文化政策と観光の連携については、ウィーンの国立歌劇場は毎日違う演目をするることによ

ってウィーンの宿泊客数を増やします。ウィーンの国立歌劇場は法律で毎日違う演目を行うことが決まっています。ウィーンには世界中から音楽好きが集まってきて、日本のように毎日同じ演目だと1泊してパリやローマに行ってしまうのですが、毎日違う演目なので音楽好きはずっとウィーンに滞在します。昼間はリンツやザルツブルグやミュンヘンに行ったりします。今ヨーロッパは非常に飛行機の交通網が発達していて、どこでも1、2時間で飛べます。ローコストキャリアという安い航空券があるので、パリーローマで30ユーロ、どの都市に行くのも4000-5000円です。そうすると移動はコストも時間もかかりません。問題はどこに泊まるかです。ウィーンのアペラ座は2000人ぐらの収容で、平均のチケットの額は1万円ぐらいですが、宿泊してオペラを見るのは富裕層です。泊まって食事をすれば、最低でも1人1日5万円ぐらいのお金を落とします。2000人が5万円を落とせば1億円です。シーズン250ステージやれば250億円です。経済波及効果は数千億と言われています。レストランもホテルも雇用が生まれるので、その人たちも消費します。2次波及までも数千億と言われています。だから税金で毎日違う演目をやってもウィーン市としては痛くもかゆくもないのです。これがナイトカルチャー、ナイトアミューズメント、夜の文化と言われるもので、ヨーロッパの各都市はナイトカルチャーを競って観光客を誘致するのです。昼の文化、凱旋門もコロッセオも動かさせませんが、夜の文化は競えます。どこに泊まるかが大事なので、例えば僕は今大阪にいますが、大阪にとってもとても大事なことで、昼間は京都でも神戸でも高野山でも行かせればいいのですが、その観光客を大阪に泊めるような施策をしなければ本当は大阪は生き残っていきません。しかし、そういうことは全く考えていません。京都も滋賀県も同じです。あれだけの世界遺産が一定の地域に集まっているのはアジア有数の地域です。あれだけ交通網も発達しています。どこに泊まるかで競うには文化で競うべきなのですがそういう発想はあまりありません。滋賀県は今年知事選挙があつて、当選すれば2期目なので文化政策をやると思いますが。

韓国の貞洞(チョンドン)劇場は国立劇場ですが外国人専用の劇場です。1番のターゲットは日本からの修学旅行生です。1時間半ぐらいで、韓国語がわからなくても理解でき、韓国の文化や歴史を学べるようなミュージカルをやります。とてもきめ細かくて、緞帳が下がっているときは「大阪府立〇〇高校のみなさんようこそいらっしゃいました」などと出ます。ミュージカルが終わると出演者がロビーにいて、お客さんを迎えてハグしてくれたりするので、日本の高校生はみんな韓国が好きになって帰ります。注文に応じて昼間は太鼓の体験や民族衣装を着て写真を撮ったりできます。高校の先生にとっては非常にありがたいことです。夜はとても心配なので。コンベンションや国際学会のエクスカージョンにも誘致して、もう10年ぐらやっていて、観客の85%が外国人で、ほぼ満員で、2チーム体制で、月曜日を休んで毎日上演していますが、今度から4チーム体制にして1日2公演するそうです。こういったことがナイトカルチャーというものです。いずれ、こういったものを沖縄に作りたいと考えています。沖縄は40万人の修学旅行生が毎年来ます。沖縄で質の高い修学旅行生向けのミュージカルが作れば、おそらく全ての高校が見ると思います。

確実に 40 万人のお客さんが入るなら、どんなバカなプロデューサーがやっても成功します。こんなに楽な商売はありません。観光と文化がきちんと連携してやれば、確実にもうかるジャンルです。これも富良野はもうやっています。富良野は観光地として今もにぎわっていますが、旭山動物園という強力なライバルが登場しました。本当はライバルではなく、これができたおかげでさらに観光客が増えたのです。今どんな北海道ツアーでも、富良野、美瑛、旭山動物園というのが入っていて、それに知床、利尻、登別を組み合わせるといった感じです。富良野には必ず来ますが、旭川の方がホテル施設が充実しているので、一旦宿泊者が旭川に引っ張られてしまいました。そこでプリンスホテルと富良野演劇工房が共同で、真冬の 2 月に富良野塾のロングランのミュージカルをやるようになりました。あの 10 万に満たない小さな農村で 1 か月ぐらいロングランをやっています。関西の高校は富良野にスキーに行きます。前は昼間スキーをして夜は旭川に泊まっていたのですが、富良野プリンスと富良野演劇工房は車で 3 分ぐらいのところにあるので、みんな夜はミュージカルを見るようになりました。旭川市内だと子供がどこかに遊びに行ってしまうので、高校の先生にとっては大助かりです。富良野は劇場以外行けません。富良野塾のわかりやすいミュージカルなので、茶髪の子たちが感動して涙を流して帰っていきます。障がいがあったりしてスキーができない子もいます。そういう子たちには昼間富良野演劇工房でワークショップ体験などもできるように、とても手厚くやっていて、すごく成功した例です。だからそういうことは実際に始まっています。観光と文化を結びつけるのは、これから有力になっていくのではないかと思います。このようにあらゆる人たちに様々な形でアピールをするということが大事だと考えています。

質疑の映像記録なし